

木村日記先生を憶う

渡邊寶陽

大学院生の頃、木村日記先生の「上級梵語」を受講したことがある。と言っても、先生の華やかな時期は、先生が印度から帰国し、著名な詩人タゴールを紹介した頃であつたのだろうか。先生には、日本語の著作も多くあるが、現在では、ほとんど忘れ去られた状態ではなからうか。僕の若い時期に既にそうした扱いであつた。いわば忘れられた印度学者といったふうである。

私の東京都立両国高校の同期生・我妻和男氏は、東京大学文学部独文科卒業後、いろいろな経過があつたのだろうが、「ベンガル仏教文化」に魅せられて、ベンガル語を駆使し、故・中村元先生にも可愛がられたが、夭折した。諸大学教授を経て、筑波大学教授として名声を得た人である。僕は疎開生活がながく、都立第三高校（この時代、どんな名称が変わつた）二年に編入したのだが、我妻氏は市川市から府立第三中学校に通学した生え抜きであつた。

我妻和男氏の死後、（公益財団法人）「中村元東方研究所」付置の「東方学院」で、我妻氏夫人（我妻綱子氏）が、替わって「ベンガル語」を教授している。僕も、「法華経をよむ」の講座を担当している関係で、たまたま、我妻和男氏が『ベンガル仏教協会』百周年記念誌にベンガル語で「木村日記先生」の紹介をしていることをお聞きし、夫人にお願ひしてベンガル語の寄稿を日本語訳して頂いた。そのことについて、駒沢大学学長↓総長を務めた故・奈良康明先生に相談したところ、奈良先生も同誌に寄稿しているというので、「ベンガル仏教協会」について書いて頂いた。お元氣であつた奈良先生が急逝され、このご寄稿も絶筆に近いご執筆になるかとも思う。さらに最近、『酒井日慎上人』（昭和三十一年、池上本門寺発行）の座談会で、木村先生自ら、詩

人タゴールのことを語って居るので、それについても掲載をお願いした。これらの本誌掲載は、すべて身延山大学国際日蓮学研究所長 望月海慧先生のご厚情によるものである。

木村日紀先生は福井県出身。出家の志を懐き、東洋大学を卒業後、インド・カルカッタ（現コルカタ）の梵語大学に学び、カルカッタ（現コルカタ）大学教授を務め、立正大学が十年にわたって「釈迦の故城」の文化財埋蔵調査をした頃、同大学に先生の写真が飾られていたと、坂詰秀一立正大学名誉教授から聞いた。その昔、新宿・成子「常円寺」の及川真能師は、山田日真（千葉県松戸市「本土寺」貫首↓京都「妙顕寺」貫首・日蓮宗管長）、木村日紀先生（カルカッタ大学教授↓立正大学教授↓同名誉教授）を弟分に加えたのだと、山田日真猊下から聞き及んだことがある。酒井日愼管長は、木村先生に松戸市平賀 本土寺貫首就任を勧めたが、法縁と縁を切った自分が同寺貫首に就任することは出来ないと断ったという（前記、『酒井日愼上人』に掲載の座談会での木村先生の発言）。在りし日の木村龍寛日紀先生の温容と、ご活躍を憶いつつ、摺筆する次第である。